二つの星

和田 正美

一

帰宅途中の路線バスが事故によるものらしい渋滞に巻き込まれて立往生し、数メートル動いてはまた停車するという状態を繰り返した。乗客の中には下車する人もちらほら見受けられたが、野川涼二はそのあたりから自宅近くのバス停まで徒歩で三十分位かかるだろうことを考えて、そのまま乗っていることにした。すると隣席の老婦人が話し掛けて来た。

「まったく困ったものですね」「そうですね」「今、仕事からの御帰りなのですか」「ええ、そうです」。老婦人は腕時計をちらと見た。「もう七時半ですが、会社で残業でもなさっていたのですか」「いえ、私の勤め先には終業時刻はあってないようなものでして、仕事は早く終らせても遅く終らせてもいいんですよ。帰りがこの時刻になるのはよくあることです」「はあ、最近の会社は昔と違っていろいろなんですね」。

バスがガタリと音を立てて少しだけ動いたが、老婦人はそれにはかまわず話し続けた。「今、おいくつですか」「私の年齢のことですか」「そうです」「三十五歳です」「あら、私の丁度半分ですわ。男盛り、働き盛りといったところですわねえ」「え！そうでしょうか」「それはそうですよ。男の人の三十五歳といえば、社会的にも家庭的にも油が乗りきった頃じゃないですか。女の私だって三十五歳の頃には・・・」。

老婦人はバスがようやく渋滞を脱して普通に動き出したらしいことに気を取られたわけでもあるまいが、その先を言わなかった。

しかし彼女はよほどの話好きなのか、その後もおしゃべりを止めなかった。

「子供さんは何人いらっしゃるんですか」「子供はおりません」。

涼二は自分がまだ独身であることを見知らぬ人に告げる気にはなれなかった。

老婦人が、「あ、そうですか。でも会社ではもう部下を使っておいでになるのでしょう」と言うのを聞いた

時、涼二は真実の一端をさらけ出してもいいだろうと考えた。

「それがですね、私の勤めは会社ではなく大学なんですよ」「あらまあ、大学の先生でいらしたんですか」「ええ、まあ」「なるほどね。勤務の時間帯が会社員と違っていることはそれでよくわかりました。ところで聞いたところによりますと、大学の先生は最近、学生指導のやり方でいろいろ苦労なさっているそうですね」「まあ、そうかも知れません」。

涼二は授業も少しは持っていたが、本務は学内の某研究所の所員であり、学生との直接的なかかわりはほとんどなかった。しかしそういういわば内輪のことを大学関係者ではない人に話して聞かせても始まらないことは明らかだった。

老婦人はその話題から離れようとしなかった。「実は私の孫娘が大学生でして、この子はこの間、先生方の御苦労のことを言っておりました。ほとんどの学生はろくに勉強もしない癖に大学当局や教授の悪口ばかり言っているので、先生方はどうすればそういう学生達にもっと勉強させることが出来るのかあれこれ工夫しているらしいとこの子は言うのです」「ほう、お孫さんは優秀なのですね」「ありがとうございます。この話を五十年前に大学を卒業した兄にしましたら、そんなことと信じられないという返事でしたよ」。

彼はそれにこう答えた。「たしかに今の大学にはそういうところがありますが、その傾向は私の学生時代にはもう始まっておりました。五十年前のことは私にはよくわかりませんが、当時の教授だって見かけほど楽ではなかったのではないかという気がします。そもそも人間の生活には昔も今も一筋縄では行かないところがあるのではないでしょうか」。

彼はそう言って、この最後の言葉は老婦人に向ってというよりはむしろ彼自身に向って発した言葉であるように感じた。

バスから降りた涼二は、おそくなったから夕食は簡単に済ませたいと考え、それに適した食材を最寄りのスーパーストアで買い揃えた。

二

油が乗りきった男盛り、働き盛りという老婦人の言葉は帰宅してからも涼二の頭の中を動いた。それが世間の常識であれば、自分は何の故あってかその常識から隔てられているようだと彼は思った。

とはいえ彼は大学の研究所での仕事を何とかそつなくこなしているつもりだった。国の内外の資料を整理して分析するという知的作業は外国語の知識を必須としたが、彼は英獨佛の三箇国語を一通り解することに加えて少しは中国語にも心得があり、その点で彼の右に出る者は研究所の中にいなかった。身分は准教授だったので所長にも副所長にもなれなかったが、それぞれ教授である所長と副所長から頼りにされていることは感じていた。時々学内の機関誌に発表する論文も割と好評だった。事務職員を除いて六人の研究所員の内、一番いい仕事をしているのは自分ではないかという自負すら彼にはあった。

しかし職務に没頭している昼の間はそれでよくても、それが終って一人だけになると涼二の中の何かは昼間の彼に謀反を起した。いくら仕事がうまく行っても、そこに自分という人間の十全の発現がなければ何にもならないではないかというのである。彼においてはこのように仕事とそれにたずさわる自分との間には隙間があり、そこから眼をそらすわけには行かなかった。このままでは自分の生はただ単に時間が過ぎ去って行くだけだと感じられる。そう感じるようになったそもそものきっかけは思い出せないが、ここしばらく彼はそういう、ことさら求めたわけではない状態を忍ばされていた。

研究所の中で日々調べ上げていることが社会的に、場合によっては国家的にも有用であることは彼とて信じているが、そう信じることで彼の心の空白は満たされはしなかった。

そしてその心理に平行するかの如く、涼二は彼自身の過去における失敗や過失がいやに気にかかるようになった。その中にはよからぬことをしてしまった時に、しまった、こんなことをするんではなかったと思ったことだけでなく、その時には何とも思わなかったことさえ含まれていた。もっとも彼の理性はそのような感じ方の危険性を彼に警告した。自分の過去をそういう風に振り返ることは自分の現在の失敗や過失に目を塞がせる源になりかねないと理性は告げるのだが、彼はそれに従おうとしても容易に従えなかった。ましてあの時にはあの言動であの人を傷つけてしまったと思い返した時には、その人が身辺にはもういないだけに彼はいたたまれない気持だった。

精神の不調は個人的な、すなわち公務に直接的な意味ではつながらない読書の領域にも及んだ。以前の涼二は本を読んでいて心を打たれる箇所にめぐり合うと、

翌朝目覚めてすぐそれを思い出し、日常性に呑みこまれるまでのしばらくの間それに思いをめぐらしたものだが、最近は朝起きた後、前夜に何を読んだのかすぐには思い出せない有様だった。その本の中の或る記述に自分は感心した筈だと考えても、それがどんな記述なのか、再びその本を開けて自分の手になる書き込みでたしかめるまでわからなかった。

研究所での知的作業を暗黙の裡に支えるであろう、もう一つの知的作業はこのように捗々しくなく、彼は時々、せめてもの救いを、かつて自分が影響を受けたつもりの作家や思想家の言の数々を想い起すことの中に求めようと努めた。

彼はそれでも惰性から、その夜に読む本を取り出して机の上に置いたが、その時、同じ机の上に何通かの郵便物が置いてあることに気づいて、『あ、そうか』と思った。彼はその日に届いた郵便物を整理し忘れていたのである。そこでそれらを手に取ったら、その中には大浦美保子からの結婚通知状があった。彼はそれを見て、『そうだったのか』と呟いた。

涼二と美保子はおたがいに相手とは結婚しないことを前提にしたつき合いを楽しみ、飲食やコンサート観賞などをよく共にし、時々抱き合ったが、一年前から彼女はふと彼に姿を見せなくなった。彼が携帯電話を通したメールを送っても手紙を出しても返事はなく、彼女は彼にはわからない何等かの理由で彼から離れたのだろうと彼は思いこむに至った。

封筒の中の結婚通知状には短箋が添えられていて、そこにはこう記されていた。「一年間、知らん顔をしてしまって御免なさい。あなたとのつき合いは悪くなかったと思うけれど、その内容は他言無用の秘め事ね。これからは別々の道を歩むことにしましょうよ」。

涼二はさすがに美保子が懐かしく、しばらくその面影が目の前にちらついたが、そうこうしている内に、それとは別の面影が或は自らの権利を主張するかの如く、或は彼の優柔不断を咎めるかの如く、そこに浮び上った。それは彼の準・結婚相手で三十歳の磯中友里の面影だった。結婚相手に準の字がつくのはこの人となら結婚してよいという気持が彼女に対しては七割であり、彼は最終的な決断を下しかねていたからである。その点、彼女の気持が九割であることはわかっていた。

涼二は友里の手を握る位のことは度々したが、それ以上の肉体的接触は避けていた。決定的な関係を結んだその後、結婚を見合せたりすると、それを申し出るのが彼女であるのならともかく、彼の方から申し出た

ら、彼女の心に修復しがたい傷が残るであろうことをおそれたのである。
　涼二のその態度に友里が不満を感じていることは彼女の言葉の端々に現れていた。現に二週間前、その時の彼女はワインで相当酔っていたらしいが、彼女は、「私が三十を過ぎても処女のままでいたら、世間に対してというよりは自分に対してみっともないわね」と口走った。
　涼二は美保子の結婚通知状をしまってから、改めて、友里と結婚すべきかどうか考えたが、結論はやはり出せなかった。

三

　あくる日の朝、出勤前の空き時間に新聞を読んでいた涼二は社会面の訃報記事に何気なく眼を落した時、あっという微かな叫び声を挙げた。彼は『速水澄男氏はやみすみお　六十五歳』の文字から眼が離せず、『そうか。あの先生はなくなったのか』と思った。
　速水教授は涼二がためには大学院生時代の恩師だった。といっても先生は涼二が在籍していた大学の専任教員ではなく、他大学から三年契約で週に一日出講して大学院の演習授業を一つ受け持っていた。涼二が大学院生になったのは先生の二年目であり、彼は一年間、十数人の朋輩と一緒に先生の指導を受けた。近代ヨーロッパの或る傾向の相互関係の研究をテーマとする授業は軽妙な話術に支えられて大層面白く、先生による外国語の訳読は正確なようだった。
　翌年には先生の直接的な指導はもうなかったが、廊下などで出会うと、先生は、「やあ、野川君、元気でやっているかね」などと笑顔で話しかけてくれた。噂によると先生は指導している大学院生の姓名を全部、一箇月以内におぼえてしまうそうだった。
　先生は涼二の大学にいなくなってからも、彼が時たま手紙を出すといつも丁寧な返事をくれた。
　先生は授業終了後によく、おおむね学内に、時によれば学外にさえ、気楽な雑談の場を設定してくれた。涼二はその集まりから、教室の中では窺い知れない様々のことを学び知った。
　そして先生の著述のことがある。先生はそれまでに何冊かの専門書を著したと聞いた涼二はその中の一冊を買い求め、それを読んで、文章はわかりやすいし内容は啓発的だと思った。ところがその話を仲間の大学院生にしたら、彼は奇妙な笑いを浮かべて、「あの先生

の本は専門的知識を利用しながら、俗耳に入りやすいことを書いているだけで、学術的価値には乏しいよ」と言って涼二を驚かせた。彼には先生の本のそういうところこそそれを価値あらしめているとしか思えなかったからである。学者の文には堅苦しくて難解で一般読者を閉め出す底のものが多いことを思う時、どうして俗耳に入りやすいことを書いてはいけないだろうか。

また先生は詩や小説は書かなかったらしいが奥行きの深いエッセイを書いてそれを時々月刊誌などに発表していた。先生は世間的には学者としてよりもむしろ卓越したエッセイストとして知られているようだった。ありふれた日常的な話題にこと寄せてヨーロッパと日本の間を行ったり来たりするその語り口にも涼二はいたく魅了された。

その速水先生がなくなったのである。新聞には明後日が通夜と書いてある。その日には研究所の業務を早目に終らせて葬儀場に足を運ぼうと涼二は決心した。

彼が研究所で十九世紀フランスの動向に関連する文書の整理をしていた時、その仕事を一緒にしていた女性所員がこんなことを言った。「この時期のフランス人は人権重視の平和を希求しながら戦争ばかりしていたし、植民地では現地人からの収奪を繰り返していたのだから、まったくわけがわからないわね」。彼はこの発言を聞いて、過ぎし日の雑談会での速水先生との遣り取りを思い出した。

その頃、学内で一部の学生が反戦平和を叫んで時々集会を開いていたので、涼二が先生にそのことについての意見をただしたところ、先生はこう答えた。

「反戦平和という言葉はたしかに美しいが、僕にとっては疑問だね。戦争をむやみにいやがったり、こわがったりするとかえって平和が維持されなくなることがあるからさ。僕が住んでいる町の役所はこの間、平和宣言なるものを出したが、平和宣言というからには如何なる兵器も持たないということだろう。この町を攻撃したがっている勢力にして見れば勿怪の幸だ。何をしても反撃されるおそれはないのだからね。ヨーロッパの政治家はどれほどの平和主義者でも、外交交渉をする時には相手の国が自分の国を折あらば攻撃したいと考えていることをわきまえた上で交渉の場に臨むらしいよ」。

或る学生が、「しかし、先生」と反問した。「平和は尊重しなければならないのではないでしょうか」。先生はそれにこう応じた。「そりゃそうさ。平和ほどありがたいものはないと言ってもいい位だ。その平和がもし

失われたらどうする？僕が言いたいのはせっかくの平和を持続させるためにはそれが破壊される危険に備えておく必要があるということさ。国際関係は甘くない。反戦平和を呼号する連中にはそのあたりのことがわかっていないのだろうな」。

涼二は先生の平和論を一つの明快な回答として今日まで記憶し続けた。戦争と平和は世人の通念に反して必ずしも対立するものではないという自分の思想は速水先生経由だと彼は考えている。

夕闇が迫る中を帰途に就いた彼はしきりに先生のことを考え、かつて自分が精神の糧を得た文筆家との面識は先生との間にだけあったことを今更のように確認した。二日後の通夜には何としても参列しなければならない。

四

速水先生の通夜に集まった人々は六，七十名を数え、その中にはさすがに先生の専任校の教職員や教え子が多かったが、出版社の人やマスコミ関係者も多少交じっているようだった。遺影は最近の写真らしいがそれは涼二が知っている往時と変らず若々しくてにこやかであり、そのことが彼をいささか驚かせた。

弔辞を読み上げたのは三人であるが、その最後に登場した秋海という名の、国家公務員らしい人のそれが一番長かった。彼と先生は学生時代からの親友であるという。秋海氏は最初にこう言った。故人との四十年を超すつき合いを通しての思い出は数限りなく、その中には自分しか知らないこともあるので今日はそれを含めてざっくばらんにありのままを語らせてもらうことにする。このやり方を亡友への自分の友情の証と考えて頂きたい。

秋海氏の回想は事実、多岐に渡ったが、涼二は次の一くだりに耳をそばだてた。

「君は四十を過ぎてから気の利いたエッセイを書いて読者の注目を集めるようになりました。或る時、君にそのことの次第をただしたら、君は僕をじっと見て、『この話は人前ではしないんだがお前にだけはしてしまおう』と言って、こう話しました。『僕は三十代の後半に入ってから精神的な危機の状態に陥ってしまった。大学教員としての知的活動に自信を持てなくなったんだよ。授業をしている時には気が張っているから何とかなるんだが、それが終ってから振り返るとただもう空々しい。本を読んでいて一応のところ感心しても、

一夜明けて思い返すと何だつまらないとしか思えない。知的活動が僕を見捨てるようになったわけさ。お前以外の部外者には通じない話だろうが、この状態で大学教員を続けることは自他を欺く行為だ。転職したくても今から採用してくれる企業はないだろうし、妻子のことを考えるとあまり思いきったことは出来なくてね。僕は精神的には空っぽになってしまった。何もかもなくなってしまった。あの頃はつらかったよ』。速水君、僕は君が僕にしか言いたがらなかったことを公表しましたので、それに続く部分もきちんと公表しておきます。僕が君に、『それでどうしたんだ』とたずねましたら、君はこう答えました。「うん、四十になった時、ふと、現在に何もないことはひょっとすると未来には何でもあることなのかも知れないという気がし出してね。未来の自分を見限ってはいけない。今までにして来たことを逆用する形で何か新しいことは出来ないだろうかと考えたよ。そこでなけなしの知識と経験を裏返すような気持でエッセイを書いて見たら、意外にもそれはうまく行ってしまった。僕は大学教員としての自分を少し違う目で見るようになり、なくしたつもりの自信が少しづつ戻って来たのさ』。

涼二はこの話を聞いて驚愕した。そうすると先生は今の自分と似たような境涯に一度は身をさらしたのだ！彼は頭がガンガンして、通夜のそこから先の進行がよくわからなかった。

通夜の式が終り、食事をとる別室に移動した時、涼二は新たな衝撃を受けた。一人の中年婦人と顔を合せ、それぞれの口から、「あら、野川君」「池田さんですね」という言葉がほとんど同時に発せられたのである。涼二にとってそれは信じられない出会いだった。

婦人は、「もう池田ではないけれど今日は池田でいいことにしておくわ」と言ってからさりげなくあたりを見回し、「ここでは何だから後で外に出て何処かで話し合いましょうよ」と続けた。そしてその場から離れて行った。

涼二は食欲がなかった。彼にして見れば速水先生のことだけでもそれに圧しつぶされそうなところへ、忘れようにも忘れられない池田夏子が、突然、現身の女として姿を現したのである。

涼二は十五年前に夏子と知り合った。当時の彼は大学生だったが或る印刷会社に、臨時社員という肩書きのアルバイトとして四箇月間勤務した。その動機は金欲しさというよりは、生きた世の中の仕組を知りたいという好奇心だった。

正社員の夏子はどんな仕事もてきぱきと片づけ、まだ若いのに社内で重きをなしていた。
或る日、彼等は急ぎの仕事を処理すべく二人で残業した。それがようやく終った時、夏子が、「もう七時半だから何処かで晩御飯を食べましょうよ。お金は私が払うから」と言った。そこで彼等は町の中の小さい中華料理店に入った。
食事が終り掛けた頃、夏子が、「野川君はどうしてこの会社で働く気になったの？」と訊いた。「現実社会がどういうものなのか、実地の勉強をしたかったのです」「なるほど。要するに大人になりたいわけね。私は二十五歳だけれど、あなたはいくつなの？」「一週間前、二十になりました」「そうか。あの方面の経験は？」「あの方面と言いますと」「鈍い人ね。セックスのことよ」「あ、いや、それはまだです」。
夏子は何か考え込むようにしたが、やがて、飲み残しのビールを一気に飲んで、「これから私について来なさい」と言った。
涼二は安ホテルの一室で夏子から性の手ほどきを受けた。最初の内は時々叱られながら言われるままに体を動かしたが、途中で急に彼女が興奮し始めてからは何が何やらわけがわからなかった。

その夜の涼二は一晩中、甘美な流れに身をひたしているような気がした。目を覚ますと、僕は女をして女たらしめているものを知ったのだから、こと女に関する限りもう何もこわいものはないと思った。女の前では気おくれがして言動が不自然になりがちな昨日までの自分が嘘のように感じられた。
涼二は夏子との関係が繰り返されることを強く望んだが、彼女は翌日も翌々日も彼と眼を合せようとはしなかった。ようやく三日目に食器などの洗い場で二人だけになった時、彼女は声を潜めて、「あれから三日たったのね」と呟いた。「ええ、この次はいつ御願い出来ますか」。彼女は彼の顔を見ず、洗い物に手を掛けながら、「何言ってるのよ。甘えるんじゃない。あれはあの時だけよ」と言った。
しかし夏子は涼二が契約期間の満了で退職する挨拶をした時、さわやかな笑顔でそれに応じてくれた。「私はあなたのことをいつまでも忘れないようにするわよ」。そして彼女はこの言葉の後、彼にしか聞き取れない微かな声で、「女とのことはうまくやってよね」と付け加えた。
涼二は三箇月後にその会社に立ち寄って見たが、夏子はもうそこにはいなかった。彼女は先月会社を辞め

てから大阪に行ったらしいがそれ以上のことは何もわからない、と彼は他の社員から聞かされた。
涼二はこうして夏子に接触する一切の手立てを失った。

五

四、五十分たった頃、夏子が涼二のところへ来て、「もう出ましょうよ」と言った。彼等は葬儀場からかなり離れたところにある喫茶店に入った。
当年四十歳の筈の池田夏子は心身ともに充実した感じで気品がある人であり、若かった頃と同じには見えないが、生き生きした眼の活発な動きは昔と変らなかった。
夏子は涼二の求めに応じて彼女と速水先生とのかかわりについて述べた。
「速水さんは私の夫の遠縁に当る人なんだけれど、夫は浪人中も大学生になってからも何かとあの人の御世話になったらしいのね。私達が結婚してから一度だけ訪ねて来て下さったことがあったわ。親切な、いい人だったわね。さっきの弔辞にもあったけれど、社会的にも立派な仕事をしていたようだし。今度のことで、カナダに単身赴任中の夫に国際電話を掛けたら、せめて通夜だけでも出席してくれないかと言われたのよ。ところであなたは速水さんの教え子か何かなの？」
この話題に一段落ついた時、涼二の中にはこみあげてくるものがあった。涼二は今向い合っている夏子とのただ一度の抱擁のことで何か言いたかったのである。しかしそれは言えず、話題は各自の生活の状況に移った。彼女は彼がまだ独身であることにさすがに驚いたらしかった。
涼二は、「結婚するかどうか迷ってる相手はいますけれどね」と言った。そしてその次に浮んだ言葉を口にすることを一度はためらったが、眼の前にいるのは他ならぬ夏子なので、思いきってそれを口にして見た。
「僕はまだ彼女に手を出しておりません。三十歳の処女に手を出しておいて万一結婚しないことになったら、彼女は深く傷つくだろうと思いまして」。
夏子はその発言に、「それは賢明なやり方ね」と応じた。
涼二はそう言われて、その「賢明なやり方」は夏子とのあの性交渉に端を発しているような気がした。それと同時に、その後の一夜に感じたところの、もうこ

れで女のことは何もこわくないという得意げな心持が思い出された。
涼二をじっと見つめた夏子はしばしの沈黙を経て口を開いた。
「あなたが言いたくても言えないことを私から言うわね。私は野川君の童貞を奪った女だけれど、あれにはそれなりの理由があったのよ。遊び心ではなかったわ。私はあなたが大人になりたがっていることを知って、それならいっそ一思いにこの坊やを私の力で、女を知っている一人前の男にしてしまおうと思ったのよ。その決断を下した瞬間のことは今でも忘れられないわ。私は二十八で結婚するまでに何人かの男に体を許したけれど、野川君との間にあったようなことをしたのは後にも先にも一度だけ、あなただけよ。このことを信じてくれるかしら？」
涼二は何者かの擒になったような気持の中から、「ええ、信じます」と言った。
夏子は、「でもねえ」と続けた。「私は野川君のことを思い出して不安に襲われたことが何度かあったわ。女との肉体的接触が裏目に出てその後の女性関係がうまく行かなくなることが男の人にはあるらしいじゃないの。その点、あなたは大丈夫だった？」
涼二は、「それは大丈夫でしたよ」と言葉に力を籠めて答えた。そしてその後の言葉はそれを発する彼の意識というよりは、その言葉それ自体の力を恃むかのように、すらすらと口から出た。
「それどころか僕はあなたとのことがあってから、女の人への自信のようなものが身についた、と思っています。僕の女性関係はそこに肉体的接触があろうとなかろうと大体のところうまく行ったようです。まあ、女の人を傷つけて怒らせたことがなかったとは言いませんが、それは男女の関係というより人間と人間との関係であって、問題の次元が別です。ありていに申し上げて池田さんは僕に女への道筋を開いてくれた掛け替えのない人です。僕を男にして下さったことはどんなに感謝しても感謝し足りない位です」。
夏子は、「ああ、よかった。そこまで言ってもらえてうれしいわ」と言ってにこやかに笑った。そして彼女は涼二の結婚問題に話題を移した。
「三十にもなった女を宙ぶらりんにしておくのは拷問よ。ここは早く結論を出しなさい。早くとはいってももちろんそれは考え抜いた末の結論でないといけないけれど。いくら考えても迷いが残るのなら、その人とは別れなさい。妥協したければしてもいいけれど、

それはあなたの内心の声がそうしてもいいと認めた場合に限られるわね。決め手は内心のぎりぎりの判断よ。自分の心の奥底に対して忠実に振舞うこと。私は昔からそうして来たつもりよ」。

一旦そこで言葉を止めた夏子は、すぐ、こう続けた。「あの時、この人なら一人前の男に仕立て上げて悔いはないと私が心の底から感じた野川君にはこんなこと言うまでもなかったわね」。そして彼女は微笑を含みながら、テーブルの上の涼二の右手に彼女の左手を重ねた。彼はかつてのそれとは異なるこの「肉体的接触」によって、言葉にはならない心境に誘われた。

喫茶店から出た彼等は秋の東京の夜景の前で足を止めた。夏子は言う。「今日は偶然中の偶然から会ってしまったけれど、私達が会うのはこれが最後ね。明日の告別式に私は出席しないし。これからは、私の大事な野川君の生活がセックスにしろ何にしろ満ち足りたものになることを、あなたの目が届かないところで願うことにするわ」。

夏子は走行中のタクシーに手を上げた。そして停車したタクシーの方へ向う前に、豊かな表情を湛えた眼で涼二を見つめ、「それでは、さようなら。永久にさようなら」と言った。

涼二も挨拶の言葉を口にしたが、それは声がかすれてうまく発音出来なかった。

六

帰宅途中の涼二は時たま足元がふらつくような気がした。頭の中は千々に乱れていた。精神的動揺にかまけるのは自分の中の何かを失わせることだ、ここは平常心を保たなければならないと自分自身に言い聞かせたが動揺は収まらなかった。

彼は家に帰り着いてソファーに身を投げてから、今日は何という一日だったのだろうとして、その日を顧みた。人間の生活に尋常ならざる時間が時として現れることはもとより承知しているが、彼にして見れば、かつて彼の生に大きくかかわった二人の人物に、一人は遺影の形で、一人はじかに言葉を交わす相手として、計らずも同じ日にめぐり合ったのである。彼は速水先生と池田夏子の相貌をこもごも思い浮べた。

先生の親友だったという秋海氏の弔辞が思い出された。それによると先生とて終始、平坦な道を歩んだのではなかったらしい。大学での業務に携わっている時にはともかくそれが終ると空しさしか後に残らず、ど

んな本を読んでも面白くないという、他の職業の人には理解しがたいだろうと思われる知識人の地獄に先生も一度は落ちたのだ。しかし先生は誰が読んでもわかりやすくしかも高度な内容を持つエッセイの数々を書くことを通してその地獄から脱け出した。それに引きかえ、この自分は、と涼二は考えた。同じような地獄の底を這いずりまわっている彼にはそこから脱け出す方途がつかめず、エッセイを書くことで自己改造を図る才覚が自分にあろうとも思えないのである。

涼二は通夜の席上で、今は未亡人である速水夫人に初めて出会った。夫人には夫の死によって取り乱した様子は微塵もなく、毅然としていて、彼の簡単な挨拶にも丁重な挨拶を返した。

通夜に続く食事の席で彼は次の会話を小耳に挟んだ。

「速水先生の奥さんは先生の仕事の中でちょっとした役割を果したらしいよ」「ふうん。女の役割というやつか」。

この遣り取りを自室で思い出した涼二の中には突飛な連想が働いた。十五年前に池田夏子より言われながら、その時には気にも止めなかったその言葉が耳の底でもう一度聞えたのである。ホテルの一室で男女のことを済ませて服を着ていた時、彼女は、「野川君は今後、他の女とやる時には、最初の女だった私がそれとなくつきまとっているような気持になるかも知れないわね。フフフ」と言ったのだった。

夏子がその肉体に涼二を迎え入れたのは、大人になりたがっている彼を一挙に一人前の男にしてしまうためだったとしても、この時の彼女はそのことについての明確な意識はないまま、それ以上の役割を引き受けていたのではなかったかという気がする。彼女とのことがあってからの彼がどんな女にも（それが肉体に関することであってもなくても）割と上手に振舞えたことは彼女に先ほど打ち明けた通りであるが、このことで一歩進めて言えば、彼女は対女性関係における彼をいつも隠微な形で動かしていたのではないだろうか。

もしそうだとすればそれは自分が結婚してからも同じだろうと思われる。結婚生活がうまく行った場合だけでなく、それがうまく行かなかった場合でさえ、そこには夏子の、目に見えない計らいがあるだろうと考えられはしないか。

涼二は合理主義者をもって任じているが、真正の合理主義は一見したところの非合理を必ずしも排除しないという見地からして、自分のこの考えをしりぞけたくなかった。ことは通常の説明や解釈を拒絶する、人

の生の根幹にかかわっている。
その日の夏子は涼二の結婚問題に助言した。最優先すべきは内心の声であり、それが承知しさえすれば妥協してもよいと言った。それを思い返しながら涼二は、彼との結婚を願っている磯中友里ともう一度じっくり話し合って見ようと思った。彼女との結婚に踏み切る自分の気持は九割でなければとそれまで考えていたのを八割に下げてもよいと考えた。それが目下の彼の「内心の声」だった。
そうしたらもう半ば結婚したような気がし始めた。結婚したら新しい生活に多大な意識と時間を割かなければならないわけだが、それはそれでよい。しかし涼二は、妻を得て身を固めた男は後顧の憂いなく社会の仕事に従事することが出来るという世間的な考えに従うことは出来なかった。彼にして見れば、結婚生活がうまく行ったところで、日々の仕事と彼自身との生命的、全人的なつながりを回復するに至らなければ浮ぶ瀬はないのである。たとい妻が著しく知的な女であったとしても、このことをめぐる苦しみを彼女に受け持たせるわけには行かない。では、どうすればいいのか。
そう考えた時、大学院での速水先生の授業の一場面が記憶の底から浮び上った。その日の授業の教材は或る著名な思想家を彼の知人が回想する文章だった。涼二はその一節を今でも思い出すことが出来る。
この頃の彼（その思想家）は不幸不運が重なって意気消沈していた。彼はこんな風にぼやいた。「もう何もかも滅茶滅茶だ。仕事は手につかないし。僕は今や絶望的だよ。いっそのこと人生を投げてしまいたい位だ」。彼は私にそう言った。
この箇所を読んだ時、一人の学生が素頓狂なコメントを挟んだ。「僕でしたらこんなに絶望したら四の五の言わずに人生を投げてしまいますね」。それを聞いた先生はその学生を穏やかな口調でたしなめた。「君ねえ、そうあっさり人生を投げてはいかんよ。それは天の理に反する行為だ。死中に活を求めるという言い方があるだろう。人間はどんなに絶望してもその絶望の中に一筋の活路を見つけ出さないといけない。この思想家にしても主要な仕事の多くを成し遂げたのはこの時期より後になってからだったよ」。
涼二は十数年の歳月を隔ててよみがえった右の言葉に思いを凝らした。絶望の中にも活路を見つけ出すこと。今にして思えば先生はその危機的状況に際してそれを見事にやってのけたと言えよう。それなら自分にだって、そのやり方はともかくとして、同じことが出

来ないであろうか。いや、それは出来ないといけないのである。

涼二は先生のこの言葉が発せられたのはまるで現在の涼二自身のためであるかのように感じた。

彼はソファーから起ち上って窓を開け、夜空を仰いだ。冷気が流れこみ、彼は秋冷の心地よさの中から考えの先を続けた。

二度と再び会うことのない速水先生と池田夏子は、涼二がそれを望みさえすれば、これからも彼を導いてくれるのではないかと思われる。彼等は野川涼二という人間の精神の空にかかって明るく輝く二つの導きの星になったと考えてよいのではないか。それらの星の光の失せることがもしあるとすれば、それは彼等のせいではなく、それを生かせなかった彼のせいである。言い換えれば彼はその務めとして、その光を消さないようにしなければならない。

錯雑した人生行路において自分の行き着く先がどんなところなのか、もとよりそれはわからないとしても、二つの星の導きがあることを信じつつまた願いつつ、生きられるだけ生きて見ようと涼二は思った。